

都市公園を再生して暮らしを豊かに

—Park-PFIによる公園整備の現在地から—

たしま ゆたか
田嶋 豊

㈱ランドスケープデザイン 設計部公民連携グループ 部長

1 「公園」と「パーク」

「赤い公園」というガールズバンドが、2021年5月コロナ禍の最中に解散した。公園設計を生業とする筆者にとって、「公園」がついているバンド名は、気にかげずにはいられないネーミングだ。しかも「赤い」が冠についている。キュートなルックスの4人組ガールズバンドだが、独創的で複雑なアレンジの楽曲が多く、一度聴いたら忘れられないバンド名とその音楽性にはまり、解散後も楽曲をヘビーローテーションにて愛聴している。

また、『パーク・ライフ』は、日比谷公園を舞台に主人公の何気ない日常を描いた吉田修一の小説で、2002年の第127回芥川賞受賞作品だ。既に20年以上前の話になるが、公園設計の実務を始めた時期とも重なり、都会の洒落た雰囲気が漂うこの「パーク・ライフ」という言葉を当時、施主プレゼンテーションで頻繁に使っていたことを思い出す。

ここで、「公園」と「パーク」について考えてみたい。「赤い公園」の由来は定かでないが、バンド名に使われている「公園」は、都市公園法に基づく制度としての公園をイメージしているのであろう。公園を象徴する緑ではなく「赤」が冠としてつくことにより、制度に対するアナーキーな印象と結びつき、バンドのアイデンティティを表現している。一方、「パーク・ライフ」の「パーク」は、制度としての公園の英訳として使われているのではなく、私たちの暮らし方＝ライフスタイルに結びついている。「○○パーク」や「パーク○○」など、名称の一部にパークがつく施設は、少し考えてみると思った以上に多くある。マン

ション、オフィス、商業施設、物流施設、研究施設等、いずれも「洗練された、お洒落な、居心地のよい」というイメージとして「パーク」という言葉が使用されているようだ。

前置きが長くなったが、ここから本稿で取り上げる Park-PFI の話に入りたい。国土交通省が創設した公園整備に関わる新たな制度の名称が、公園 PFI ではなく、Park-PFI(パーク・ピー・エフ・アイ)ということに注目したい。深読みかもしれないが、このネーミング自体に、新たな公園の可能性への期待が込められているとも感じる。そのようなことを頭の片隅におきながら、本稿では、Park-PFI で整備された公園を「パーク的公園」と定義し、私たちの暮らしとの関係性について考えてみたい。

2 Park-PFI の制度概要

Park-PFI(公募設置管理制度)は、2017年の都市公園法改正に基づき、都市公園に民間の優良な投資を誘導し、都市公園の質の向上や公園利用者の利便性の向上を図ることを目的に創設された。2021年4月時点の国土交通省の調べによると、国内65公園で活用事例があり、そのうち30公園が供用を開始、現在も100ヵ所以上で公募準備が進んでいるとのことだ。

一方、Park-PFI と勘違いされることの多い PFI 法(民間資金等の活用による公共施設等の整備等の促進に関する法律)による都市公園整備は、法施行後20年以上経過するが、公園単体としての実績はわずかである。PFI 法では対象施設がすべての公共施設

であるため、都市公園に限定されている Park-PFI と単純な制度比較は無意味と承知しつつも、Park-PFI の急速な導入実績には目を見張るものがある。

Park-PFI は、公園内に設置するカフェ等(公募対象公園施設)からの収益を公園の整備運営に還元することが制度の柱となる。また、整備後は指定管理者制度等の導入により、民間事業者による公園の運営管理期間が最長20年となっているのも特徴だ。さて、Park-PFI を導入した公園整備事例をみるとその多様性に驚かされる。公園規模は1,000㎡以下の小規模公園から100ha 超の大規模公園まであり、公園立地は都心から郊外まで、新設も改修(拡張を含む)の事例もある。また、収益施設ではカフェやレストランの飲食施設以外にも、アスレチック施設、温浴施設、宿泊施設等の導入事例がある。

開園した公園に足を運ぶと、まず感じるのは、「洗練された、お洒落な、居心地のよい」という場所の雰囲気です。正に「パーク」なのだ。このようなパーク的公園の特徴を慶応大学環境情報学部の石川初教授は、「カフェ」、「デッキ」、「芝生」が、かつての「ブランコ」、「滑り台」、「砂場」に代わる「新三種の神器」と指摘している。現在では公園内にお洒落なカフェがあるのは日常の風景となってきたが、ほんの10年前の公園では考えら

れないことであった(写真1・2)。

では、Park-PFI が短期間に導入されたのはなぜか。発注者側からすると、各公園の実情に合わせて柔軟に制度設計を行えて、民間企業側は、身の丈にあった投資規模で公園事業に参入でき、自由度の高い提案が可能であるからだ。Park-PFI という型はあるが、型破りなチャレンジができる。それが Park-PFI ともいえる。

3 パーク的公園から考える

次に、Park-PFI による二つの整備事例を取り上げて「パーク的公園」について掘り下げてみたい。

1) 北谷公園(渋谷区)

北谷公園は、渋谷駅から徒歩10分程度、渋谷区役所に近接する面積約960㎡の小さな街区公園だ。公園の整備運営は、東急(株)を代表企業とする「しぶきたパートナーズ」が担っており、渋谷区初の Park-PFI 事業として2021年4月にリニューアルオープンした。公園は渋谷公園通りから一本裏路地に入った若者に人気のセレクトショップが集積する通称「ブチ公園通り」に立地している。改修前の公園は、面積の半分近くを駐輪場とバイク駐車が占有し、喫煙所も設置されていたため、園名板がなければ公園とは思えない雰囲気の場所であった。改修後の公園に足を運ぶと、見違える



写真1 新宿中央公園(新宿区)



写真2 いろは親水公園(志木市)

ような景色が広がる。別の意味で公園とは思えない、お洒落で、居心地のよい「パーク的公園」なのである。園内で目を引くのは、収益施設(公募対象公園施設)として設置されたブルーボトルコーヒーの店舗だ。店舗内及び周辺からは公園全体を見通すことができ、明るく開放的だ。また、カフェ周辺のベンチ及び敷地内高低差を活用した階段状ベンチの使い方を観察してみると、一人利用が多いのが特徴だ。ランチをとる近隣店舗のワーカーの人、ショッピングの途中でコーヒー片手に休憩している人、パソコンを開いて熱心に仕事をしている人、ぼーっと過ごしている人等、利用者それぞれがパーソナルスペースとして場を利用している。なんと贅沢な公園の利用の仕方だ(写真3)。公園にはパブリックという言葉がつかまとうが、プライベート感がほのかに漂ってくる北谷公園は、都心公園の新しい場づくりを感じることができる。

2) 長井海の手公園ソレイユの丘(横須賀市)

長井海の手公園ソレイユの丘は、PFI事業により整備が行われた全国初の都市公園(総合公園)である。PFI事業期間(2005~2014年度)終了後は、指定管理者制度(2015~2022年度)に移行され、民間活力により運営管理が行われ続けてきた公園だ。開園20年の節目を見据えて公園未供用部6.6haの活

用と既存公園施設機能の刷新の改修手法としてPark-PFIが導入された。事業者選定公募の結果、(株)日比谷花壇を代表企業とし当社を含む8社を構成企業とする「エリアマネジメント横須賀共同事業体」が設置等予定者に選定された。本誌が発行される2023年4月には、総面積約28haの大規模都市公園としてリニューアルオープンし、以降19年間にわたり共同事業体が公園の運営管理を担うことになる。

筆者は、公募段階から公園プロデューサーの立場で本事業に関わり続けており、ここで本公園の特徴について紹介したい。整備コンセプトは、「海と大地と、人をつなぎ、新しい出会いと発見のある場所へ」である。横須賀西海岸の雄大な自然環境を身近に感じながら、本稿冒頭でも紹介した「パーク・ライフ」を体験できる場所を目指している。導入施設としては、海への絶景を満喫できるジップラインや眺望テラス、グランピングやトレーラーハウスを含む多彩なキャンプ施設、温浴施設、ドッグラン、ふれあい動物園、花畑や体験農園等、この公園でしかできない体験を提供するコンテンツがそろそろ(図1)。また、20年近い公園運営期間において多様な利用者ニーズを柔軟に受け入れることのできる「大きな器」をイメージした基盤整備を行い、開園後も継続的に進化・更新し続ける公園を目標としている。



写真3 北谷公園(渋谷区)



図1 長井海の手公園ソレイユの丘(横須賀市)

本稿を執筆している2023年2月末現在、公園整備が大詰めを迎え、開業準備が慌ただしくなってきた。来園者それぞれの「パーク・ライフ」が生まれてくる、開園後の風景を想像するだけでも、わくわく感が止まらない。また、本公園整備が三浦半島全体の活性化に資することも大いに期待している。

3) パーク的公園と私たちの暮らし

Park-PFIによる公園整備が全国的な広がりを見せる時期と同じくして、新型コロナウイルス感染症の急激な感染拡大が始まった。感染拡大初期には、一部の地域で公園全体や一部施設を閉鎖せざるを得ない状況も発生したが、現在では、公園は比較的感染リスクが低い場所と認識されている。また、国土交通省が2020年8月に実施した生活行動調査で、「公園、広場、テラスなどゆとりある屋外空間」が「充実してほしい都市空間」のトップになったことから、皮肉ではあるがコロナ禍が「パーク的公園」の整備を後押ししたともいえる。

北谷公園と長井海の手公園ソレイユの丘の二つの事例から見えてくるのは、新型コロナウイルス感染症の拡大により劇的に変化した私たちの暮らしに順応するかのように公園自体も変化していることだ。「パーク的公園」の「洗練された、お洒落な、居心地のよい」という場の雰囲気を目を奪われがちだが、公園が私たちの多様なライフスタイルに寄り添う場所となる可能性を示したことが、現時点でのPark-PFIの成果といえる。

4 公園的公園から考える

公園設計の実務に携わってから早くも四半世紀が過ぎた。最近では新聞や情報誌に公園特集の記事を目にする機会も多くなり、昨今の公園への注目度の高まりは「価値観の転換」といっても過言ではない。Park-PFIによる公園整備は今後ますます

発展し、常識にとられない公園が次々に誕生するであろう。その一方で、設置施設からの収益還元が制度の柱となるPark-PFIが導入できない公園が多くあるのも現実である。

最後に、筆者が設計を担当した練馬区中村かしわ公園を紹介したい。NTT社宅跡地に2012年に整備された面積1.6haの近隣公園である。その公園の特徴は、少し言い過ぎかもしれないが、何もないことである。旧三種の神器である遊具類も、新三種の神器であるカフェもない。トイレ、ベンチ、水飲み場等はあるが、それ以外には原っぱと植栽地があるだけだ(写真4)。Park-PFIで整備された公園をパーク的公園というなら、こちらは「公園的公園」とでもいうのだろうか。では、何もないことが退屈な公園かということ、全くそうではない。公園を観察して気づくのは、利用者が自分の居場所や遊び方を見つける公園であり、利用者の工夫次第で様々な可能性を見つけられる場所なのだ。園内の制札板の多さには目を覆いたくなるが、それもこの公園が使い倒されている証なのかもしれない。

「パーク的公園」と「公園的公園」、どちらの公園にも「個性」が求められる時代となっている。個性豊かな公園が、私たちの暮らしをさらに豊かにする好循環をもたらす新たなステージが始まることを期待したい。



写真4 中村かしわ公園(練馬区)